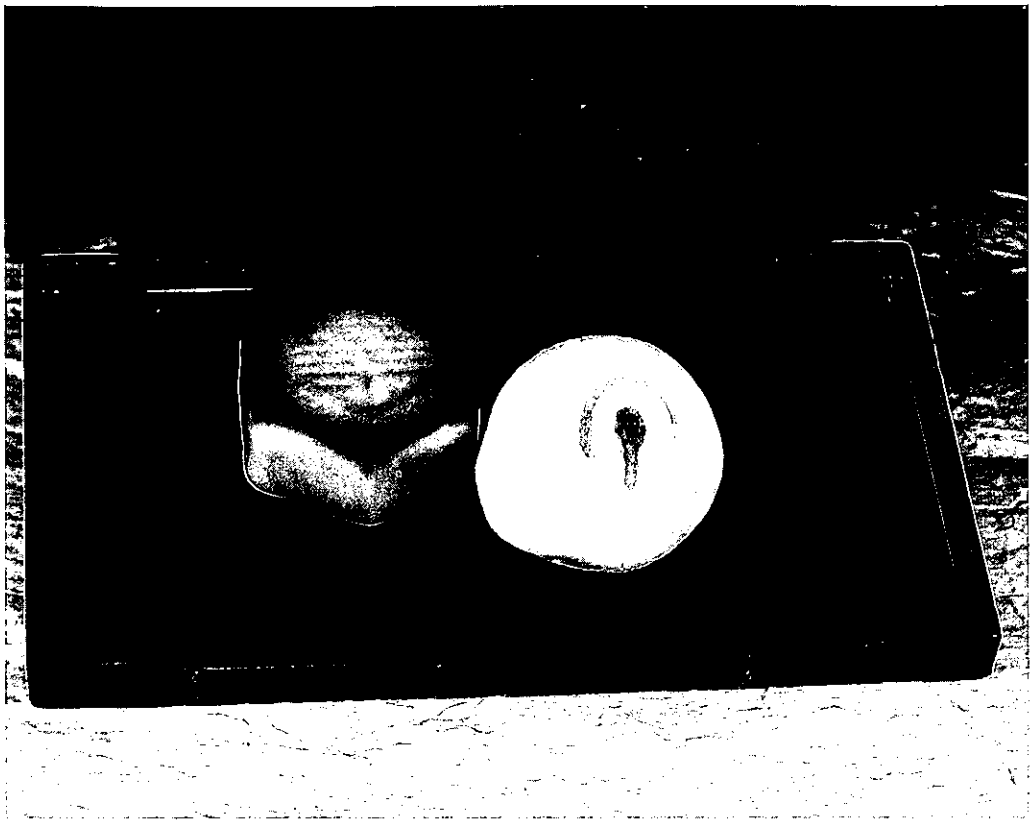
蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811
◆スタッフ◆
小林国二・高橋潔・室賀清輝
高橋利春・屋代 健・飯泉隆史
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



写真のお菓子「鶴・亀」は、
鶴～雪平（餅）生地で作った鶴と、亀～黄味煉切餡で作った亀です。
正月にふさわしい鶴は千年亀は万年、いつまでも（継承）と言う意味です。

ご家族の皆さまでご覧ください

慶春

今年も宜しくお願い申し上げます　翠巖弘

今年は酉年、鳥が大空を自由に飛ぶように、人々が平和で心豊かに自由を謳歌できる年になることを冀うものです。

昨年は世界中で色々な面で激動の一年でした。特に韓国におきましては国民の怒りのデモが毎週おき、日本でもデモの様子、韓国専門家の解説などが毎日テレビなどで放映され、ついには朴大統領の弾劾訴追案が可決されました。

そんなおり、西郷隆盛も愛読されたといわれる佐藤一斎（名は担、江戸時代）の著した『言志四録』の中の『言志晩録』に著された「治乱の機は、公と不公とに在り」（国家がよく治まるか乱れるか、その働きのもとは、上に立つ者の公平と不公平とにある）の語録が目に留りました。

韓国民の怒りや、世界中の問題もそれぞれの国民が格差社会と感じたり、不平等感を感じる人々が増えてきたことのあらわれではないでしょうか。

昨年の日本では「何々ファースト」という言葉がよく聞かれました。都民ファースト、アスリートファースト、震災復興・育事・仕事・経済。国益・環境・平和・国民ファースト等々。どれも大事、また、立場によっても「ファースト」が変わります。何々ファーストは耳触りの良い言葉ですが、何々が一番だ！　最優先だと決めつけると意見の衝突も起こりやすくなります。

それぞれ、どれも重要なことですが、広く他の事柄、立場、考え方にも目を向け、耳を傾けたいものです。

清の沈徳潜が編集した『古詩源』に

「日出でて作し　日入りて息う　井をうがって飲み　田を耕して食らう　帝力我に千て何か有らんや」の詩があります。北海道教育大学の後藤秋正先生は「漢詩漢文名言辞典」の中で、古代の理想的な生活が伝わってくるおおらかな歌いぶりである。文明の進歩は人間に何をもたらしたのかと問いかけられているような気さえしてくると評されております。

私も時には心寂かに改めて「人生とは何か」思惟したいものです。

【日々精進(三十五)】

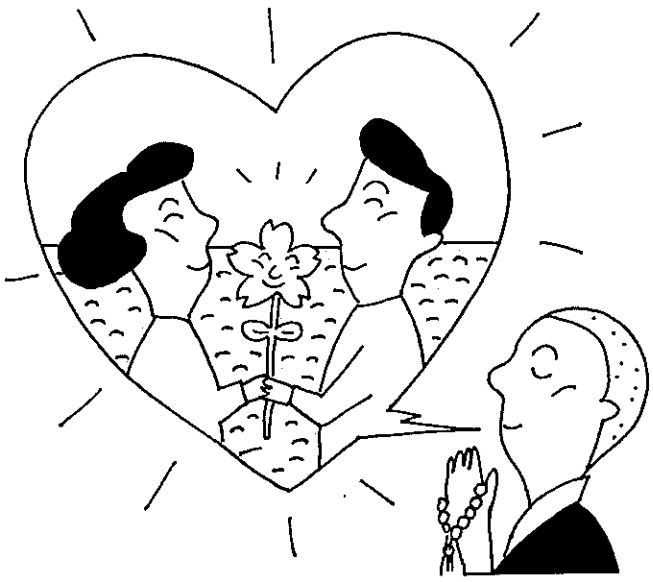
愛の言葉に花が咲く、「愛語」を心がけて

近藤 真弘

あけましておめでとうございます。

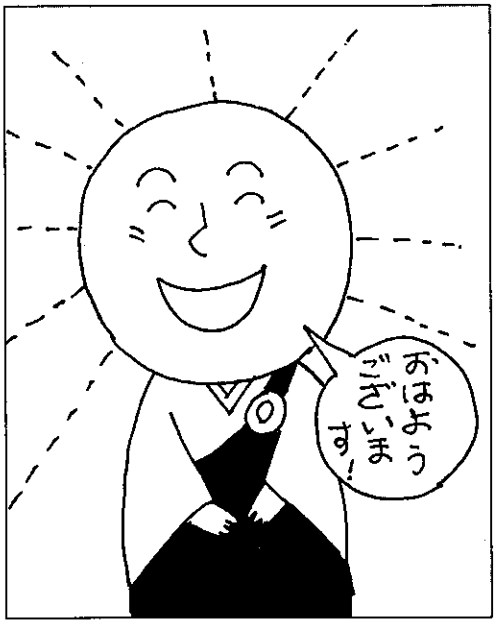
新年を迎えると、この挨拶の言葉が行き交います。挨拶は様々な場面で様々な言葉を用います。

藤本幸邦老師の作られた詩でこんな詩があります。『朝はおはようございます、夜はお休みなさいませ、頂きますにご馳走さま、お出かけお帰りご挨拶、誰かに会ったらこんにちは、別れるときはさようなら、失敗したらすみません、いたわる言葉はご苦労さん、お礼の言葉はありがとう、愛の言葉に花が咲く』この詩を安善寺の先代が書でしたためた暖簾をお持ちの方もいるかと思います。



言葉というのは書くことも含め、自分の意思を表す伝達の手段です。それだけに言葉一つの違いで相手に与える印象は大きく変わります。

私が毎年暮れに楽しみにしているものがあります。以前この紙面でもご紹介しましたが、それは新聞広告クリエーティブコンテストというコンテストです。毎年テーマが与えられ、そのテーマに沿った広告を作り優劣を競います。昨年はテーマが「ことば」でした。最優秀賞に選ばれた作品は「犯行に使用された言葉」というタイトルで内容は、ポスター全体がほぼ真っ白な余白で左上に小さな字で「犯行に使用された言葉は未だ見つかってない。」とだけ書かれていました。



審査委員長のコメントに「新聞の紙面を広げてこれを見た読者が、家族や友達とこの作品を通して、言葉を介したコミュニケーションの大切さを考えてくれたらいいなと思う。」とありました。新聞には犯罪がおこるとその内容や犯人の動機などが綴られます。しかしそこに綴られてはいませんがその現場では言葉のやりとりもあったはずです。そこに必ずあったはずだが、そして一番重要なはずの言葉の会話が綴られない、そんな問題を提起するとともに、改めて言葉の重要性を提起する作品ではないかと思います。

道元禅師様は正法眼蔵の中で愛語についてお教えになっています。愛語とは慈しみを持った愛の言葉であり相手を思いやって出る言葉です。正法眼蔵には「愛語は、愛心よりおこる、愛心は、慈心を種子とせり。」とあります。愛語は愛の心からおき、その愛の心は慈悲の心から生まれるということです。

日常的に我々が使う言葉、時にはそれが凶器にもなれば、相手を慈しむ愛の言葉にもなります。如何なる言葉も用いるのは自分自身です。

「ありがとう」、「おかげさま」、一つ一つの言葉にそれぞれの意味もあります。普段何気なく当たり前に使用する「ことば」ですが言葉一つの重要性を感じ、慈愛の言葉、愛の言葉に花が咲く。「愛語」を心がけていきたいです。

秋らしい秋を たっぷり堪能しました

大崎　享

十月のよく晴れた日曜日。これまでお墓参りと法事でしか訪れたことがなかった安善寺さんに、はじめて「焼き芋の会(?)」が催されるということで、ふたりの子供を連れてお邪魔しました。

十時前に到着すると、たき火用の枯葉がギッシリと詰め込まれた八つ分のごみ袋が既に準備されていましたが、まだ足りないということで、隣の公園まで遠征して大人も子供も一緒になって文字通り枯葉をかき集めました。枯葉をみんなで集めるのも子供たちにとっては遊びのひとつのようで、ほうきなどで一所懸命にかき集める姿に和まされました。しかし、集めても集めても枯葉ってなくならないものですね…。

お芋は濡れた新聞紙に包み、外側にアルミホイルを巻いて、たっぷりの枯葉のたき火の中で蒸すようにじっくりと時間をかけて創ります。焼き芋未経験の私は、たき火の中にさつまいもを突っ込んで時間が経てば出来上がり、くらいに考えていましたが、たき火の火力を見たり、それに伴って随時お芋の位置を調整したりと、ひと時も手が離せないようでした(すっかりご住職にお任せでした)。

さて、一仕事終えた(?)子供たちはおやつとジュースで一休み。人数もひとり、また一人とどんどん増えて、賑やかになってきたところで、奥様が腕によりをかけたカレーライスの登場です。十四、十五人の子供たちが床の間の前にならんでカレーを堪能する姿はとても可愛らしく、親たちの撮影タイムとなりました。

父親の私としては、なかなか見られない光景で、なんだかジーンときたり…。そして満を持しての焼き芋タイム！　太いお芋にハフハフとかじりついて堪能する子供たち。「あちい！」「うめえ！」焼き芋は別腹ですか？　今さっきカレー山盛りで食べてましたよね…。一方、大人たちも負けじとカレーとお芋を堪能してましたが、私を筆頭に、たき火の焼き芋ははじめてという方もたくさんおいでだったようです。

中までほくほくのお芋は真っ黄色で、いわゆる石焼き芋よりも水分が抜けずにじっくりと過熱され、ほっこりととてもいい塩梅に仕上がり、これは美味しいねと話しながら味わいました。

焼き芋でよくある、食べ続けると口の中がぱさぱさになって水を飲みたくなって、水を飲んだらなかがいっぱいになって…、ということもなく、最後まで美味しくいただけました。

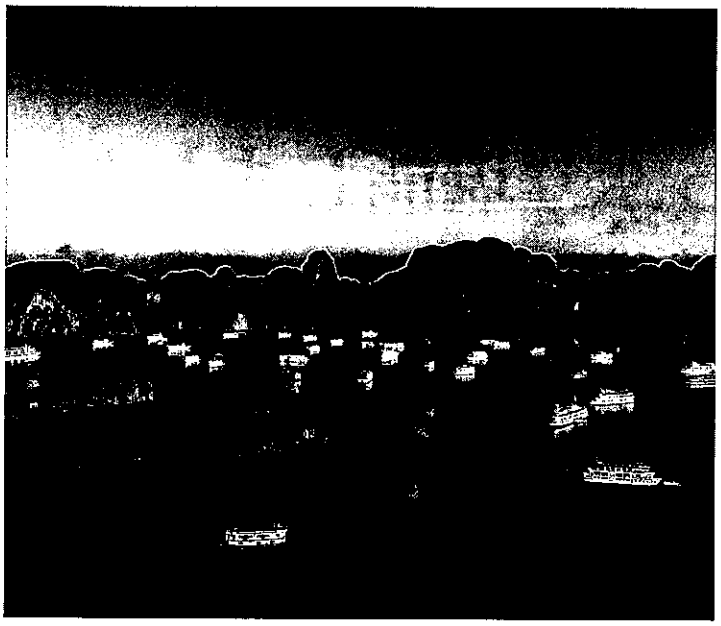
今思い返すと、長岡の短い秋を秋らしく楽しめた一日だったように感じます。子供たちにも良い思い出として残ったのではないでしょうか。

今回はすっかりお任せでしたが、来年は子供たちにいいところを見せられるようにお手伝いできればと思います。日常ではなかなか体験できない貴重な一日をありがとうございました。

ベトナム2大都市周遊と世界遺産ハロン湾宿泊クルーズ

新潟ビーエス観光　飯泉 隆史

近年日本の海外旅行において人気なのがアジア諸国です。私も仕事柄沢山のアジア諸国を訪ねましたが、中でもお気に入りはベトナムです。好きな理由は食文化。東岸を海に面していることもあり魚介類が豊富で味付けが日本人に合います。そしてフランスの領地だったこともあってフランス料理も本格的です。米粉で作られたフォーも美味。日本では食べる機会も少ないと思います。



この度は安善寺様の主催でベトナムの旅行を企画していただきました。南部に位置するホーチミンと首都がある北部のハノイ。そして海の桂林と呼ばれる世界遺産ハロン湾を訪れました。

十一月十八日出発日は夕食を隅田川屋形船にてお召し上がり頂き、羽田空港より深夜便にて出発。約6時間後、早朝にホーチミン到着。まずは郊外のクチへ。クチはベトナム戦争時の最前基地があった所。ベトナムを語る上でベトナム戦争の悲劇を忘れてはいけません。午後はホーチミン市内観光へ。永源寺というお寺があり、ここの鐘は大本山總持寺貫主岩本猊下寄贈のものです。ここでも日本とベトナム、そして曹洞宗との関係を深く感じることができます。昼食のメインはバインセオ(ベトナム風お好み焼き)他にも多数の食事が並び食べきれないほど。ベトナムは間違いなく体重が増えて帰国しますね。その後、統一会堂～サイゴン大教会、中央郵便局～戦争証跡博物館を見学しホテルへ。

3日目はホーチミンより首都ハノイへ。北に1800キロも移動するわけですが、例年なら日本の秋の涼しい頃の天気ですがなぜか三〇度を超える暑さ。半袖で十分でした。本日は市内観光。2010年に世界遺産に登録されたタンロン遺跡はハノイの王朝の歴史を学べる遺跡です。夜は伝統芸の水上人形劇を鑑賞。

4日目はハロン湾へ。クルーズ船中にてハロン湾の一夜を過ごします。船は様々な島を間近に沖へ向けていきます。松島とはレベルが違います。そしてスンソット鍾乳洞を見学。自然の神秘を感じます。またティトップ島では展望台よりハロン湾を一望することができました。

船上での夕食はまた格別なものです。サンデッキにて星を眺めながら皆さんで団欒の一時。静寂に包まれた船上から見る星空は忙しい日々を忘れさせてくれます。

翌朝ご来光を眺め、手漕ぎボートに乗り換えて探検気分を味わいました。昼前に港に到着。楽しい時間は短く感じるものですね。

再びハノイへ戻り陶器で有名なバッチャン村へ。夕食はベトナム風フレンチを頂きました。そして夜中空路日本へ。日本の気温は十一度。ハノイとの温度差は二十度と、本当に寒さが身に沁みました。成田空港にて解散。

他にも中部の古都フエやランタン祭りで有名なホイアン、リゾート地のダナンなどベトナムは魅力的な所が沢山あります。食事は美味しいですから食べ過ぎに注意してくださいね。ご参加の皆様大変有難うございました。

おばあちゃん、これからは天国から見守っていてね！

平松 奈保

私が三才くらいの頃、よく祖父母の家に泊まりに行っておりました。祖父が持っていくお弁当と私の分も作ってくれ「時計のハリが重なったら食べましょう」と教えてくれたり、そのお弁当をこたつの中に入れて温めておいたり(笑)電子レンジなどというものはまだありませんでしたから、こたつがいい仕事をしてくれました。

待っている間もじっとなんかしていません。テレビを見るとかではなく、壁に向かって逆立ちするからおばあちゃん手伝えだの、歌うから聞いてくれだの、一緒に歌えだの、かくれんぼするから見つけてくれだの…、祖母の仕事の裁縫箱で遊んだり、祖父母が飼っていた犬の散歩をさせてもらったり、ほうきの使い方を習ったり、思い出すと私の中では映画のワンシーンようにキラキラと輝く美しい記憶になってよみがえります。

ある夜、祖父母と私の三人で花火をして遊んでおりましたら、私が持っていた花火から火の粉が足の指に飛んで来ました。二人とも大変おどろき、やさしく手当をしてくれたのを覚えています。きっと私もおどろいて、さほど熱くもないのに大声を出したのでしょう。二人とも、ごめんね、ごめんねと…、いつまでもやさしく暖かく可愛がってもらっておりました。

引っ越しを機に一緒に暮らし始めました。私が中学生くらいの思春期という時期の頃…、何かある度に冷たく、そっけない態度で接していた時がありました。そんな自分自身に腹立たしく、しかし顔を合わせれば同じことの繰り返し。過去は決して変えられないけれど、出来ることならあの時に戻って謝りたい。それなのにいつもやさしい子だと話してくれます。祖母の気持ちだったのでしょうか、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

私が新潟を出て、関西で舞台に立つと決まった時には大変喜んでくれ、飛行機に乗って観に来てくれました。私が住むマンションにも泊まりに来てくれ、夜中中お話していて眠れなかったり、楽しい思い出がたくさんあります。

そして必ず「体に気をつけれや！」と、おばあちゃんは口ぐせのように必ず言ってくれました。そう、自分の体より人の体を心配するやさしい人でした。

本来はとってもやさしい人なのに、祖父がまだ元気だった頃は二人の会話はぶっきらぼうだったり、素っ気なかったり、そんな風に見えたこともありました。しかし、祖父が亡くなって何十年も経ちますが、ずっと指輪をはずさず、時々無意識にその指輪を確認するように触り、大切にはめている姿を見て、おじいちゃんの話しをする時のあの顔は、あぁいい夫婦だったのだな、私が子供の頃に見かけたあれは二人の仲のほんの一部でしかなく、芯では深くつながっていたのだと、生涯を共にするということは、こういうことかと学んだものでした。

祖母は祖父の元へ行きました。何十年ぶりの再会です。写真の祖父の顔が微笑んだように見え、また二人はいつもの口調でおしゃべりをしているのかと思うと、あたたかい気持ちになります。

この世に生きていく私たちは、淋しい気持ちは当然ありますが、これからは天から見守ってくれる存在となり、今までよりも、もっと近くにずっとそばにいてくれる気がします。「おばあちゃん！これからは見守らなきゃいけない人が大勢いるから、忙しいね！」。私は手を合わせて、会話します。いつもありがとう！

KAKA笑の会
「秋のオペラコンサート」

加瀬由紀子

秋も深まった十月二十八日夕、本堂にてオペラコンサートが開催されました。

東京からお越しいただいた新進気鋭の声楽家とピアニストを紹介しましょう。

バリトン・品田広希さんは、小千谷市出身。国立音楽大学・演奏学科声楽専修卒業。オペラソリストコース修了。リナ・トーソン氏はじめ国内外の著名声楽家に師事、既に各劇場のオペラに二十役、出演を果たしています。

ソプラノ・金子悠里さん。東京都八王子出身。国立音楽大学・演奏学科鍵盤楽器専修ピアノ専攻卒業。吉田たまき氏他著名演奏家に師事。第四回蓼科音楽コンクールイン東京第三位受賞他、声楽伴奏を中心に活躍されています。

若さあふれるメンバーのセッションと、品田さんの軽妙な解説に、会場はなごやかな雰囲気に包まれました。

当日の曲目は、はじめに日本の歌曲を中心に、

・「待ちぼうけ」
・「竹とんぼに」
・「野ばら」
NHK大河ドラマより
・「真田丸」のテーマ
・「さびしいカシの木」
・「落葉松」
・「うぬぼれ鏡」

休憩をはさんで後半はオペラからの歌曲です。

・「ジャンニ・スキッキ」より〝私のお父さん〟
・「魔笛」より〝おいらは鳥刺し〟
・「タイス」より〝タイスの瞑想曲〟
・「トゥーランドット」より〝ご主人様、お聞きください〟
・「カルメン」より〝闘牛士の歌〟

楽しい三人の歌と会話に、コンサートも佳境に達し、場内の拍手に応えたアンコール曲は、「アベ・マリア」そして会場のお客様と一緒に歌った「ふるさと」。

クラシック堪能のステキな宵を惜しみつつ、散会となりました。なお、前回の「津軽三味線」コンサートでの余剰金を、「熊本地震」被災先に寄付させていただきました。ご協力ありがとうございました。

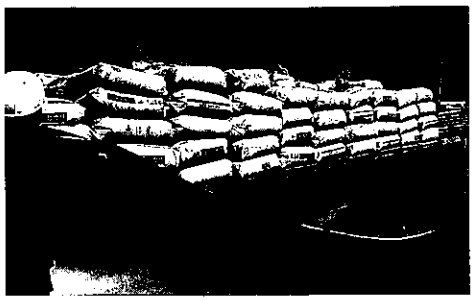
「KAKA笑の会」では今後も楽しい催しを企画しますので、ご期待ください。

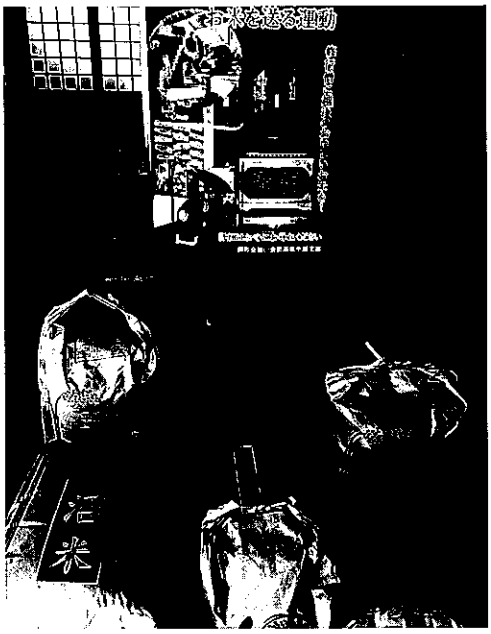
副住職通信

「大本山總持寺にお米を送る運動」ご報告します

以前この紙面でご案内をさせていただいた、「大本山總持寺にお米を送る運動」ですが、安善寺からは五名の方に計一七〇キロものご協力をいただきました。ご報告を兼ね、御礼申し上げます。

總和会・嶽山会新潟県中越支部全体では七トンを超える量のお米が集まり、先月二十九日に無事、大本山總持寺にお届けいたしました。





越後のおいしいお米を戴き、修行僧も益々修行に精進していることと思います。この運動は来年以降も継続して行う予定です。またこの紙面やお寺でご案内をさせていただきますので、ご協力を戴けたら幸甚に存じます。

「落ち葉で焼芋」開催のご報告

十月三十日、予定しておりました「落ち葉で焼き芋」のイベントを無事開催いたしました。当日は天候にも恵まれ、約四十名の方が集まりました。子供は幼稚園児や小学校の低学年の子がほとんどでしたが、女の子は芋をホイルに包むお手伝い、男の子は落ち葉掃きのお手伝いと、それぞれ一生懸命頑張ってくれました。

安善寺でも十数年ぶりの焼き芋で、うまく焼きあがるかいささか心配しておりましたが、出来上がりはまさにホッカホカの上出来で、皆さんおいしそうにほおばっておりました。たき火を見るのが初めての子供たちは、立ちのぼる煙の多さにビックリしたり、たき火から出てくる焼き芋に感動したりと、独特の秋の匂いを体全体で感じていました。

来年もまた開催しようと思います。大人も子供も振るってご参加ください。

旅立ち

（平成廿八年九月～十二月末日まで）

金子トシ様　九月六日寂
新潟市西区

鈴木　武様　九月九日寂
長岡市寿

藤崎　實様　九月十一日寂
東京都墨田区

小林　善秋様　十月廿一日寂
長岡市福島

平岡るり子様　十月廿二日寂
長野県北佐久群

齋藤正男様　十月廿一日寂
長岡市長峰町

村越悦子様　十一月十二日寂
長岡市城岡

遠田勝保様　十一月十三日寂
長岡市福井町

西田久枝様　十二月三日寂
東京都荒川区

山口ゆきえ様　十二月八日寂
新潟市東区

石坂　弘様　十二月廿一日寂
長岡市蔵王

ご冥福をお祈りします。

第七十七号、春号は平成二十九年三月十二日(日)発刊予定です

ボブの独り言

落葉の処理も大変です…

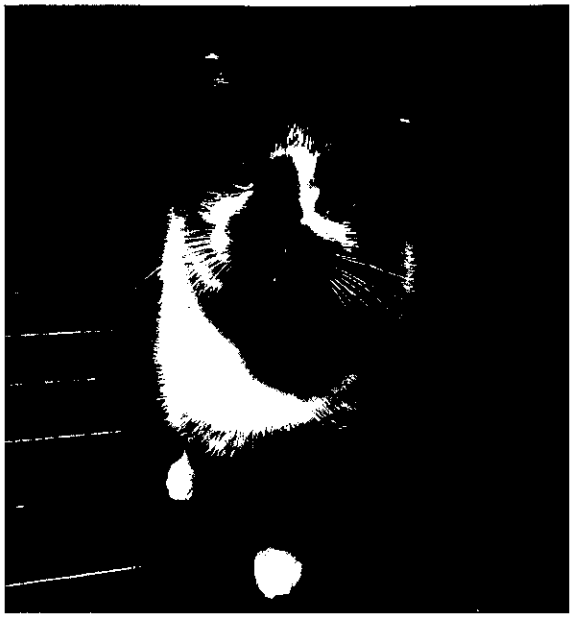
ボブの独り言

新しい年を迎えました。昨年暮れには鳥インフルエンザで多くの鶏が犠牲になりましたが、明けて今年は「酉年」です。昨年は去ることを願ったのですが、地震・台風・雷と年々大規模になる災害が続きました。

十二月も半ばの夜九時頃、ももちゃんを連れて外に出たバーバ、何を見たのか、大きな声で住職を呼ぶ声が聞こえて来ました。訪われるまま外に出て来て、空を見上げ「初めて見たなー！ 何だろう？ 写真撮れるかな？」と言っているうちに、それはだんぐ〜と薄くなっていきました。お月さまの周りに大きなく〜輪が出来ていたのです。

宇宙大好きな住職にとって、一番興味をひくものだったから、寒い中直ぐに外に出て来たのも納得です。何事もなければ良いのですが…。

秋になるといつも欅と銀杏の落葉で埋めつくされる境内、境内以外にも飛んでゆく落葉は止めることが出来ませんが、ご近所の方々にはいつもいつも感謝です。



そんな中、落葉で焼芋を焼いていた思い出が懐かしく、子供達にもと思いつき、多くの子供達を集めて、焼芋大会をしました。最初に落葉に火をつけた瞬間、煙がもくく〜と立ち登り、ちょうど烏の巣に直撃、静かに休んでいた烏が、ガーガーと逃げていきました。其の後、風が吹く度きりもなく落ちる葉は袋に入れては保管、本堂の前にテントを張って、一〇〇袋位たまった落葉を副住職と久美さんが車に積み込んでいる所に、住職の友人が偶然訪ね、「車が勿体ないなー！ トラック貸してやるョ！」の一言で、トラックを借りて焼却場に往復すること数回、約三トンの落葉の処理が終わりました。住職も「若い者が居ないと出来ないな！」とポツリ。持ちつ持たれつですね。

十二月に入ってから四人目の孫が出来、真人君も四月から小学生。楽しくなりそうです。

ニャ〜ン！

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- ●思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- ●私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- ●教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- ●嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集雑感

明けましておめでとうございます。今年は干支の第十番目にあたる「酉（とり）」で、六十干支は三十四番目の「丁酉（ひのととり）」です。トリの羽ばたきと共に皆様も大いに羽ばたいて欲しいものです。

季刊誌も随分と長くなって参りました。段々と編集者も齢を重ね発想も鈍くなっています。羽ばたくどころか減速気味のようです。

しかし、ご住職に若い方々の編集員を補完下さいとお願いしておりましたら、次々に名乗りを上げて戴き、平均年齢が少し下がりました。これで、また新しい季刊誌が続けられるでしょう。

勿論、株式会社アサヒの代表取締役社長 伊藤英與様や社員の方のご協力なくしては出来ないことでありますし、毎々感謝申し上げます。また、編集におきまして、皆様の投稿なしでは出来ません、これも重要なポイントであります。昔のお寺のイメージではなく現代的な集いの場にと思いこの季刊誌が登場しました。

今も続けられている、KAKA笑の会・座禅会・旅行会など、皆様方にも参加をお願いし安善寺そのものを盛り上げて戴いております。時代が変わっても地域のコミュニティは変わりません。皇紀2676年続いた日本の神や仏を大切にして来た結果です、まだまだ続くのです。日本の良きところは伸ばし且つ伝統・文化を継承せねばなりません。この季刊誌も出来るだけ情報提供としての役目を担いたいと心して取り組んで参ります。皆様のご協力宜しくお願い申し上げますとともにご投稿を重ねてお願いしたいと思います。

小林国二